随想　現代の教育

～学ばない子どもたち～

加藤　宏光

最近の子どもたちは勉強しない、とは著者の子どもの頃に父親からよく聞かされた言葉である。そして、著者自身が若いスタッフに同じことを喋っている。それにしてもここ一五～二〇年間に学びのレベルやスタイルは大きく変わった（低下したと言ってもよい）。

内田樹（うちだ・たつる）氏の著書に《下流志向》というものがある。副題に〈学ばない子どもたち、働かない若者たち〉とある。この書物に書かれたことがすべて正しいとは言えまい。しかし、著者には大いに共感できた。

ゆとり教育とやらの曖昧な教育方針が国の施策として取り入れられて以来、子どもたちの学習意欲が極端に失われていることは肌で感じていたが、この書物に紹介されている小学校の場面を想像すると、そのレベルは想像を絶する。

兵庫県の芦屋といえば、有閑マダムという流行語まで生まれた五木寛之氏の《芦屋婦人》で有名な高級住宅街である。そこで小学校へ通う内田氏の子どもの授業参観に出かけたときの様子が述べられている。

授業に際してまともに先生の話を聞いているのは最前列の一〇人前後だけで、あとは授業時間中後ろを向いて私語を続ける子や自分の席を立って教室の中を歩き回る子が目立っていた。帰宅後子どもに『今日のような授業風景はいつものことか？』と尋ねたところ、返ってきた答えは『今日は授業参観だったから、みんないつもより静かだった』とのこと。

このストーリーを読んで、荒廃した学校の姿が目に浮かんでくる。著者はわが父親の博学に舌を巻いたものである。父は落ちぶれ武士の子孫で話に洩れず貧しい環境で学ぶことを趣味として外地で育ち、大学は旅順工科大学を経て満鉄の研究所に職を得た。

父の博学は息子が劣等感で苛むには十分すぎるほどのもので、専門の物理、数学は言うに及ばず化学、医学、薬学、日本歴史、世界歴史、日本地理、世界地理からはては獣医学にまで及んでいた。

劣等生を自認する著者は今でも若いスタッフに自分は父親世代の一〇〇分の一しか知らないと語りかける。そしてこう加えて尻を叩くことにしている。『君たちは、その私のまた一〇〇分の一しか知らない。だとすれば、君たち世代は明治の先人に比べると一〇〇ＰＰＭしか知らないことになる』

極論であるが、こうした現象は確かにある。そして《勉強が足りないこと》の責任は本人にのみあるのではない。社会構造が負うべきものが多い。

この書物には、義務教育につ

いての見解が次のように述べられている。

《義務教育というが、子どもたちに学ぶ義務はない。学ぶ権利があるだけである。しかるに教育を受ける義務がある、と理解すれば、それの反対給付に何かの利益を求める結果をもたらす。そこで、彼らは『何のために勉強するの？』と問い掛ける。つまり勉強すれば何を給付されるのか、と……》そしてこの書物の著者は続ける、《大人たちはその問い掛けに対する答えを持たない》。

確かに著者たち世代は勉強中に買い物等の使いを頼まれることも多かった。勉強は権利であり、また子どもが家庭という社会で果たす役割を期待されていた証である。

ひるがえって著者世代が親として子どもに接していたころにはすでに親が子どもの塾への送り迎えをするのは当然であり、家庭の手伝いを強いるよりは『そんなことは良いから勉強しなさい!!』等と勉強を強いるパターンがほとんどであった。

書物によれば、それゆえに子どもたちは勉強を義務と受け取り、反対給付の利益を求める。しかし、そんなものは有り得ないから、子どもたちはあえて勉強を拒否する、と語りかける。著者の実感としてもまた「然り」である。問題は、学ばない子どもたちはいずれ大人になる。そして社会を背負うのである。社会が日本国内に限られるならまだよい。先の世代は消えて行くし、相対的な比較で優劣が決まるのだから。

しかし、いますでにグローバルな社会の真っ只中にいる。その中で先進的な四七か国のうち日本の子どもの勉強時間が四五番目と知れば、いささかならず焦りを感じる。

《学びが何のために……》等と問われる前に、《学ぶことが何より楽しい》と感じられる社会を構築しなければこの国の将来は危うい。